

英語

今回の模擬試験では、近年の入試レベルや傾向を踏まえた上で、名大受験に必要な英語力を問う設問を盛り込んだ。平均の正答率は、大問Ⅰ・長文読解（36%）、大問Ⅱ・長文読解（34%）、大問Ⅲ・会話系長文読解&自由英作文（52%）、大問Ⅳ・自由英作文（28%）であった。特に名大では、あまり馴染みのないやや難解な英文が出題されることが多く、今回は大問Ⅰ、大問Ⅱともにそのような英文を配置した。多くの人が時間配分に苦戦したと思われるが、選択肢問題が多いという利点を活かせば、時間の浪費を防ぐことができるため、得点源とすべき問題で実力を発揮できなかった人は、本番での解答順序や時間配分について再考する必要があるだろう。また、自由英作文では設問の要求を正確に読み取り、論理的な文章を構築する力が問われた。

Ⅰ 〈長文読解（論説文）〉

古代人の生物学的特徴を研究する既存技術（DNA 解析）と新技術（プロテオミクス）について、それぞれの利点と欠点を論じた英文記事からの抜粋である。馴染みのないテーマだったこともあり、平均正答率は 36%であった。ただし、それぞれの利点と欠点が対比されている点に着目すれば、いたずらに時間を浪費することは防げたであろう。また、調査・研究系の論文は「研究者の調査内容とその結果」を押さえることで格段に読みやすくなるため、常に意識したいところだ。設問 1 の「抜き出し問題」は時間を浪費する問題の代表である。下手をすると全文を何回も読まされる羽目に陥るからである。本問の正答率が 11%であったことから、ここで時間を浪費した人は注意したい。設問 5 の空欄（え）は難問であった。実際、正答率も 9%にとどまっている。それ以外の（あ）～（う）は正答率が比較的高めであったことから、しっかりと得点したい。また設問 6 で本文に合致する選択肢を 2 つ選べた生徒は 16%にとどまった。内容真偽問題は全問正解を取りたいところなので、失点した人はその理由をしっかりと確認してほしい。記述問題については、ある程度日本語が乱れていても、「部分的には正解と判断できる」答案には得点を与えている。実際の得点に満足せず、しっかりと正答例と照らし合わせて復習してほしい。

Ⅱ 〈長文読解（論説文）〉

「貿易と文明の関係」について書かれた記事からの抜粋である。正答率は 34%と低い水準であった。解答解説にも「やや難解で、あまり馴染みのないテーマ」とあるように、これは名大の入試本番で出題が予想される、高い読解力が求められる典型的な英文であった。設問 2 は、名大頻出の文挿入問題である。設問全体の正答率は 40%、全問正解は 7%にとどまった。大きく差のつく設問であり、合否を左右する問題であることから、不正解だった問題はしっかりと復習してほしい。設問 3 は前置詞挿入問題である。

（イ）、（ウ）、（オ）は基本問題、（ア）と（カ）が標準、（エ）は難問であった。（エ）を除いて全問正解だったのは 5%であった。また標準問題である（ア）と（カ）の両方を正解した人は 11%にとどまって

おり、語彙力の増強が急務といえる。設問4と5は「文脈≡文章展開」の理解を問う問題であった。全問正解したい設問であったが、2問とも正解したのは46%であった。不正解だった人はしっかり復習したい。設問6は近年出題されるようになった設問形式である。記号問題の正答率は50%、記述問題で半分以上の点数を獲得できたのは14%であった。2027年の入試においても出題が予想されるため、不正解や解ききれずに白紙で答案を提出した人は今一度解き直してほしい。

Ⅲ 〈会話文〉

「日米の金融文化比較」という話題に「学術レポートの書き方アドバイス」という要素が加わった会話文である。名大の問題の中では絶対に高得点を獲得しなければならない問題であるにもかかわらず、正答率は52%にとどまった。大問ⅠとⅡでの時間配分に失敗し、本問に十分な時間をかけられなかった受験者が多かった可能性が高く、該当する人は注意したい。実際、記号問題を全問正解できた人は6%しかいなかった。また、文章全体の理解が求められる設問4で2問とも正解できたのは18%であった。ある意味、大問Ⅲの記号問題は全問正解を狙いたい問題であることから、失点の多かった人はしっかり復習してほしい。設問5の自由英作文については、文法・語法に崩れない英文には「減点法」で点数を与えるという採点方法をとっているため、比較的正答率が高かった。しかし、その点数に満足することなく、解答例を参考に、よりよい英文が書けるように努力してほしい。

Ⅳ 〈自由英作文〉

「ミルクの供給量と地域との関連性」を読み取る問題である。大問Ⅳの設問1で半分以上の点数を取った人は14%、設問2は44%と、設問2の正答率が高かった。これは、答案に盛り込む内容に制限がないため、文法・語法に崩れない英文にはある程度の点数が与えられたことが大きい。しかし、大問Ⅲでも言及したが、その点数に満足することなく、解答例を参考に、よりよい英文が書けるように努力しなければ、これ以上の伸びが期待できなくなるため、しっかりと復習してほしい。最後に出題形式について一言。2025年は図表が使われない出題形式であったが、2026年は図表形式が復活した。そのため、今回は図表形式の問題を出題したが、実際の入試がその通りになるとは限らないため、典型的な自由英作文の問題（意見論述型、賛否型など）は解いておく必要があろう。